

プラトンの『饗宴——愛について——』に関する

マルシリオ・フィチーノの注解¹⁾

佐藤 三夫 訳

第 1 話

第 1 章 (序言)

哲学者たちの父プラトンは、彼の誕生日であった11月7日に、饗宴の席で食事のかたづけられた後に、81歳にして世を去った。この饗宴は、プラトンの誕生日とその死の記念日とを同時にかねていたのだが、昔のプラトン派の人たちすべてによって、プロティノスやポルフェリオスの時代にいたるまで、毎年くりかえしもよおされたのである。だがポルフェリオスの死後1200年ものあいだ、年ごとにともよおさるべきこの宴は、とり行なわれることなく過ぎた。ついに当代になって、名高い人士ロレンツォ・デ・メディチが、プラトンの饗宴を再興しようとして、フランチェスコ・バンディーニを宴の司に任じた。そこでバンディーニは11月7日を祝おうとして、豪奢のかぎりをつくして、カレッジの地にプラトンの徒たる9人の宴客をもてなしたのである。その宴客とは、フィエゾーレの司教アントニオ・アッリ、医者フィチーノ、詩人のクリストフォロ・ランディーノ、修辞学者のベルナルド・ヌッツィ、トマソ・ベンチ、その靈魂の徳と卓越した才

能とのゆえに宴客たちが英雄と呼んでいたわれわれの親友ジョヴァンニ・カヴァルカンティ、2人のマルスッピーニ、すなわち詩人のカロロ・マルスッピーニの息子たちであるクリストフォロとカロロであった。最後にバンディーニは、私が9番目の宴客となることを望んだ。それというのも、マルシリオ・フィチーノがさらに加わることによって、詩女神達の数がみたされんがためであった。

食事がかたづけられると、ベルナルド・ヌッツィが、『饗宴——愛について——』と題されたプラトンの書物を受け取って、この饗宴において述べられたすべての談話を読んだ。彼は読みおえると、他の宴客たちに、めいめいがこれらの談話のひとつを説明するように請うた。すべてのひとが同意した。こうしてくじがひかれると、最初の談話、すなわちパイドロスの談話は、ジョヴァンニ・カヴァルカンティが説明することになった。パウサニアスの談話は神学者のアントニオが、医者エリュクシマコスのは医者フィチーノが、詩人のアリストパネスのは詩人のクリストフォロが、若いアガトンのはカロロ・マルスッピーニが、説明することになった。トマソ・ベンチにはソクラテスの談論

1) 使用テキスト

- (a) Marsilius Ficinus, *Opera Omnia*, Basilea, 1561, 1576 (Torino, 1962).
- (b) *Marsilio Ficino's Commentary on Plato's Symposium, the Text and a Translation, with an Introduction by Sears Reynolds Jayne*, University of Missouri, Columbia, 1944.
- (c) Marsile Ficini, *Commentaire sur le Banquet de Platon*, texte du manuscrit autographe présenté et traduit par Raymond Marcel, Paris, 1956.

われわれはこれらのテキストのうち、原則として(c)のラテン語原文を使用した。なぜならマルセルの版は、ヴァチカン図書館所蔵のフィチーノ自筆の原稿を複写したもので、その原典批判にもっとも信頼がおけると思われたからである。しかしながら、若干箇所においては、前後の脈絡および論理的観点から、他の版にしたがった場合もある。ジェインは(b)において、(a)を最良のテキストとして、それにしたがったむね述べている [(b)

P. 14]. だがマルセルは(b)について、「批判の欠如と疎漏」を遺憾に思ったといっている [(a), P. 130]. フィチーノ自身のイタリア語訳および他の異本などについては、(b)および(c)の注を参照した。(b)の英訳および(c)の仏訳は大いに参考になったが、あくまでラテン語原文に忠実にしたがうよう努めた。(b)の解説的な注には教えられるところが多かったけれども、本訳においては、注はフィチーノによって引用された著書等の最小限にとどめた。またフィチーノによって引用されたプラトン等の文章は、たとえ原文と異なっている場合でも、原則としてフィチーノ自身がラテン語で記したとおりに翻訳した。表題の原文はつぎのとおりである。

- (a) In Convivium Platonis De Amore, Commentarium.
- (b) Commentarium Marsilii Ficini Florentini In Convivium Platonis De Amore.
- (c) Commentarium Marsilii Ficini Florentini In Convivium Platonis, De Amore.

が与えられ、アルキビアデスのはまさにクリストフォロ・マルスッピーニに与えられた。いずれの者もこのようにくじの定めをよしと認めた。ところが司教と医者とは、一方は靈魂の世話をするために、他方は肉体の世話をするために、立ち去らねばならなかったので、かれらの語る部分を、ジョヴァンニ・カヴァルカンティにゆだねていった。その他の者たちは彼の方を向き、耳傾けようとして沈黙した。そこでかの英雄はつぎのように語り始めたのである。

第2章 愛はいかなる規則によって賞賛されるか。その尊厳とその偉大さは何であるか。

私にとってこよなく喜ばしいことには、おお宴をもにする紳士諸賢よ、本日はからずもこのくじのおかげで、私はミュッリノスのパイドロスの役をうけもつことになった。さしもの弁論家テーバイのリュシアスが、彼の友情を大事に思うあまり、苦心惨たんして書いた演説で彼の心を得ようとした、あのパイドロス²⁾の役を、と私はいうのだ。ソクラテスは彼の天性に感嘆のあまり、いつのときかイリソス川のほとりで、彼の美しさに心動かされ有頂天になって、神的神秘を頌めうたったほどであった。そのソクラテスは、以前には、天上のこののみならず地上のことも、およそ何ごととも知らぬと揚言していた³⁾のに。プラトンは彼の才能にいたく心ひかれていたので、彼の研究の最初の諸成果をパイドロスに捧げた。プラトンは彼にその警句を、彼にその悲歌を⁴⁾、彼に『パイドロス』と題された美についての彼の最初の書物を、捧げたのであった。それゆえ、このパイドロスに私が似ていると判断したのは、むしろ私ではない。なぜなら私は、それほどわが身を買いかぶってはいないから。むしろそう判断したのは、第1にはくじのなせるわざであり、ついで、あなたがたの賛成の拍手である。それゆえ、かくも幸先よく私は、なによりもまず彼の話喜んで説き明かそう。ついで、私の能力の及ぶかぎり、アントニオとフィチーノの代役を果たそう。

プラトンに追隨する哲学者はだれしも、おお紳士諸君、いかなる事物に関しても三つのことを考察する。三つのこととはすなわち、事物に先行するもの、同伴するもの、そして後続するもののことである。もしこれらが良ければ、哲学者はその事物そのものをほめた

たえる。だがもし悪ければ、彼はそれを非難する。それゆえ完全な賞賛とは、事物に先んずる起源を吟味し、現在の様子を物語り、つづいて起こる結果を示すところの賞賛である。いかなる事物も、その先行せる経歴によって高貴なものとして、その現状によって偉大なものとして、その帰結するところによって有益なものとして、賞賛されるのである。それゆえ、それら三つのことから、つぎの三つのことが賞賛の中に包括されることになる。すなわち、高貴、偉大、および有益がそれである。

それゆえにわれらのパイドロスは、とりわけ愛が現在卓越していることを観察して、彼を偉大な神と呼んだのである。彼はさらに、神々と人びとの賛嘆にあたいするもの、とつけ加えた。それもむべなるかなである。なぜならわれわれは、偉大なものをとくに賛美するから。かの愛はたしかに偉大なものであって、人びとも、そしてかれらのいうように神々も、すべてその支配に服せられているのである。なぜなら、古代人によれば、神々も人びとのように愛するのだから。それこそはオルペウスとヘシオドス⁵⁾が、死すべきものの心も不死なるものの心も、愛によって征服されるという際に、かれらの意味せるところである。さらに、愛は賛美されるべきだといわれる。なぜならだれしも、自分がその美を賛美するところのものを愛するからである。実際、神々、あるいはわれわれの神学者たちのいうように、天使たちは、神的な美を賛美して愛し、人びとは肉体の美を賛美して愛する。しかもこれこそはまさに、それ自身に固有の、現在卓越せることより生じた愛の賞賛である。パイドロスはついで、愛はすべての神々のうちでもっとも古いものであると主張することによって、その先行せる経歴から愛をほめたたえる。その古い起源が物語られるや、そこに愛の高貴さが輝き出る。3番目に、そのすばらしい有益性が結果から明らかになると、彼は愛をその帰結からほめたたえるであろう。だがわれわれは、まずその古くして高貴な起源を論じ、ついでその将来の有益性を論じるであろう。

第3章 愛の起源について

オルペウスは『アルゴ船遠征譚』⁶⁾のなかで、ケイローンと英雄たちの面前で、メルクリウス・トリスメ

2) プラトン『パイドロス』, 229 a - 234 c 参照。

3) プラトン『ソクラテスの弁明』, 19-24頁参照。

4) ディオゲネス・ラエルティオス, III, 5頁参照。

5) ヘシオドス『神統記』, 121-22頁。

6) オルペウス『アルゴ船遠征譚』, 415頁。

ギストゥス⁷⁾の神学にしたがって、事物の始原について歌ったときに、彼は世界よりも前に混沌^{カオス}をおき、そしてサトゥルヌスやユピテルやその他の神々よりも前に、かの混沌のただなかに愛をおいて、こういった。「愛はもっとも古く、それ自身で完全な、思慮にたけたものである」。

ヘシオドス⁸⁾は『神統記』において、ピュタゴラスの徒であるパルメニデスは⁹⁾『自然について』という書物において、また詩人のアクシラオス¹⁰⁾にしても、オルペウスやメルクリウスと一致した意見であった。プラトンは『ティマイオス』において、混沌を同じような仕方で述べ、混沌のなかに愛をおいている¹¹⁾。しかもまたパイドロスは『饗宴』において、同じことを述べたのである¹²⁾。プラトン主義者たちは、形なき世界を混沌と呼び、反対に、形づくられた混沌を世界と呼んでいる。かれらにとっては、世界は三つあり、同様にして混沌も三つあることになる。すべてのもののうち第1のものは、万物の創造者たる神であり、われわれが善そのものと呼ぶところのものである。彼は最初に天使的精神を創造する。ついで、プラトンによれば¹³⁾、この世界の靈魂を、最後に世界の身体を創造する。われわれはかの至高なる神を世界とは呼ばない。なぜなら、世界とは数多くのものから組成されて調えられたもののことを意味しているのだから。ところが、かの神はまったく単純であらねばならないのだ。むしろ、神はありとあらゆる世界の初め（原理）にして終り（目的）である、とわれわれは主張する。神によってつくられた第1の世界は、天使的精神である。第2の世界は、宇宙的身体の靈魂である。第3の世界は、われわれの見分けるこの造化のすべてである。

これら三つの世界の中に、また三つの混沌も考察される。最初に神はかの精神の実体を創造する。われわれはそれをまた本質と名づけている。この本質は、その創造の最初の瞬間には、形をなさずおぼろげであった。神から生まれでるにつれてそれは、何かある生来の欲求によって、自己の原理である神の方へ向かうよ

うになる。神へ向かうとそれは、神自身の光線によって照らされる。その欲求は、かの光線の輝きによって燃えたとせられる。欲求がすべて燃えたとせられると、それは神に付着する。付着することによってそれは形づくられる。なぜなら、全能である神は、自身に付着せる精神の中に、創造されるべき事物の本性を表象するのだから。それゆえ、われわれがこれらの物体の中に感じるすべてのものは、いわばある靈的な仕方での精神の中に描かれたのである。この精神の中に、諸天空や諸元素の球、星々、諸蒸気の本性、そして石、金属、植物、および動物の形相が生み出される。

神のある配剤によってかの天上的精神の中に思い描かれた、すべての事物のかかる相相が、イデアであるということ、われわれは疑わない。またわれわれは、諸天の形相すなわちイデアをしばしば天神と呼び、第1の遊星の形相をサトゥルヌス（土星）、第2の遊星の形相をユピテル（木星）、そして以下の遊星についても同様な仕方で呼ぶ。このようにしてわれわれはまた、火のイデアをウルカーヌス神と呼び、空気のイデアをユーノー、水のイデアをネプトゥーヌス、地のイデアをプルートルと呼ぶ。それゆえ、すべての神々は、低次の世界（下界）のある一定部分をあてがわれているのだが、かの高次の（天上的）精神の中に集められたそれらの部分のイデアなのである。だが、かの精神が神へ近づくことが、神によって形づくられたゆえに完全な、イデアのこの受胎に先んじたのである。この接近には欲求の燃えたつことが先行し、これには光線が注ぎ込まれることが先行し、それには欲求が最初に向かうことが先行し、またそれには精神の無定形な本質が先行したのである。さらに、まだ形づくられていないその本質を、混沌である、とわれわれは称する。その本質が初めて神へ向かうことを愛の誕生、光線の注入を愛の糧、つづいて起こる炎を愛の増大、とわれわれはいう。神への接近を愛の躍動、形づくることを愛の完成という。すべての形相やイデアの総括を、われわれは、ラテン語でムンドゥス、ギリシャ語でコスモス、すなわち調っていること、と呼ぶ。この世界そしてこの調っていることの魅力をなすものが、美である。かの愛は生まれるとすぐに、精神を美へとひきつけて、以前には醜かった精神を、のちには美しい精神へと導いたのである。このようにして、美に魅了させ、醜いものを美しいものに結びつけることこそは、愛の特性である。

それゆえ、愛が混沌のすぐ後につづき、しかも世界

7) ヘルメス・トリスメギストゥス『ポイマンドレース』, I, 4-6頁。

8) ヘシオドス『神統記』, 116頁以下。

9) cf. Diels, *Fragmente der Vorsokratiker*, Flaggm., 13, S. 127.

10) cf. *Id. frg. I*, SS. 510-11.

11) プラトン『ティマイオス』, 30 a.

12) 『饗宴』, 178 b.

13) 『ティマイオス』, 30 a. b.

に先んずるとともに、世界の諸部分に配されたすべての神々に先んずるということを、疑う者があるか。なぜなら、精神のかの欲求はその形成に先んじているのであり、そしてひとたび形づくられるとこの精神の中にこそ、神々と世界が生まれるのだからである。それゆえオルペウスが、愛を「もっとも古い」ものと名づけたのは正当であった。さらに彼はそれを、「それ自身で完全な」といっているのだが、それはあたかも、自己自身を完成させる、といっているかのようである。なぜなら、精神のかの最初の衝動は、本性上、神からそれ自身の完成を汲み取り、そしてそれを、それから形づくられる精神に、またそれから生まれる神々に、委ねるのだと思われるから。その上、彼は愛を「思慮にたけた」ものと呼んだ。そしてそれは不当ではない。なぜなら、その特質が思慮である全知が精神に与えられるからである。というのも、精神は愛によって神へ向かう際に、神自身の輝きを反映して輝いたゆえである。精神は、眼が太陽の光へ向けられるのとまさに同じ仕方で、神へ向けられる。実際、眼はまず眺め、ついで太陽の光を見、3番目に太陽の光のなかに事物の色や形を知覚する。眼は、最初はぼんやりしており、混沌のように形をなしていないので、眺めるうちに光を愛する。この光を眺めていると眼は光かがやかされる。この光線を受けいれると、眼は事物の色や形に形成される。ところで、かの精神は生まれるとすぐにしかも形をなさぬままに、愛によって神へ向かい、そして形づくられるように、そのように世界靈魂は精神の方へ、またそれがそこから生まれた神の方へと向かうのである。そして最初には無形で混沌であったのに、世界靈は愛によって精神へ向けられ、精神から受け取った形相によって世界となる。この世界の物質もまた同様である。それは最初には形の調っていない醜い混沌にすぎなかったのだが、生来の愛によってただちに靈魂へ向けられ、自分を靈魂に従順に捧げたのである。そしてこの愛によってそれらは結びついて、物質は世界の中に見られるすべての形の調いを靈魂から得、このようにして混沌から世界とされたのである。

それゆえに三つの世界、そしてまた三つの混沌がある。結局、すべてにおいて愛は、混沌をともない、世界に先んじ、眠れるものをめざめさせ、ぼんやり暗いものを照らし出し、死せるものをよみがえらせ、形なきものに形を与え、不完全なものを完全なものとする。これらよりも大いなる賞賛の辞が、語られることも考へ出されることも、およそありえぬことだろう。

第4章 愛の有益性について

だがこれまでわれわれは、愛の起源と高貴さについて論じてきたにすぎなかった。いまやその有益性について論ずべきだとわたくしは思う。愛が人類に寄与する個々の恩恵を述べることは、たしかによけいなことであろう。ことに、それらすべてが要約してとらえられうる場合には。実際、すべては、悪を避けてわれわれは善にしたがうということに帰せられる。人間にとって悪しきこととは醜いことと同じである。同様にしてまた、善なることとは美譽と同じである。たしかにすべての法律や教説は、醜いことから遠ざかり、美譽となる業を行なうように、人々に教える以外のことをめざしていない。ところがほとんど無数の法律や学芸が、ながい年月を経てついにかろうじていたりつくこうしたことを、愛自身は短時日に簡単になしとげてしまう。なぜなら、羞恥が醜いことからひとを遠ざけ、秀でようとする意欲がひとを美譽へ呼びよせるから。愛ほど容易にしかもすみやかにこれら両者をひとびとにもたらしものは、他にはない。

われわれが愛というとき、美への欲求のことだと解してもらいたい。実際、あらゆる哲学者において、それが愛の定義である。ところで美とは、多くの場合、主として、多くのものの調和的均整において生じるある魅力である。それには三つの種類がある。実際、靈魂においては多くの徳が均整のとれていることによって、魅力が存する。物体においては多くの色や線が調和していることから、魅力が生じる。同様にして、音においては多くの声が協和していることから、最大の魅力が生じる。それゆえ3種の美がある。すなわち、靈魂の美、身体の美、そして声の美がそれである。靈魂の美は精神によって認識される。身体の美は眼によって、声の美はもっぱら耳によって知覚される。それゆえ、精神、視覚、聴覚は、それらによってわれわれが美を享受しうる唯一の手段であり、また愛は美を享受しようとする欲求であるので、愛はつねに精神、眼、耳によって満足される。嗅覚、味覚、あるいは触覚は、いったい何の役に立つのか。これらの感覚は、におい、味、温熱、寒冷、柔らかさや固さ、また他の同様なものを知覚するのである。それらのいかなるものも人間的な美ではない。なぜなら、それらは単純な形相であるから。ところが人体の美は、相異なる四肢の調和を要求する。愛は美の享受を、あたかもその目的とみなしている。この美は、精神、視覚、聴覚にのみ属している。

したがって愛は、これら三つのものに限られる。残りの感覚が求める欲望はむしろ、愛ではなくして、情欲や狂気と呼ばれる。さらに、もし愛が人間に関して美そのものを欲求するならば、しかも人体の美がある均整によってなりたち、均整ということが節度であるならば、愛はただ、節度あり、つつましく、上品であることだけをもとめるということになる。それゆえ、味覚や触覚の快楽は、ひじょうにはげしく熱狂的であるので、精神を不安定にし、人間を混乱させるものだが、そうした快楽を愛は欲せぬばかりか、不節制によって美に反しているということで、憎み避けるのである。淫乱は不節制へ、それゆえ不調和へみちびく。そのためにそれはまた醜さへいざなうように思われる。しかしながら愛は美へいざなう。醜さと美とは相反している。それゆえわれわれを両者へ駆り立てるそのような衝動は、互いに相反していると思われる。したがって、性交の欲望と愛とは、たんに同一の衝動でないのみならず、また反対の衝動であることが示される。こうしたことは、愛の名を神に与えた古代の神学者たちによって証言されている。のちの神学者たちもまた、このことを十分確認した。実際、神にふさわしい名前で、卑しい事物と共通しているものなどありはしない。それゆえに、分別のある精神の持ち主ならば誰しも、神的な名前である愛を、軽率にも無分別な放埒の意味に転じて用いることのないよう用心しなければならない。ディカイアルコスや、あまりに愛に耽ったというかどでプラトンの尊厳をあえて嘲弄する者であれば他の誰にせよ、恥じて赤面するがよい。なぜなら、端正な、誉むべき、神的な感情に、われわれは余分にも十分にも、けっして耽ることはできないから。このことから、すべての愛は誉むべきものであり、そしてすべての愛する者は正しいということになる。なぜなら、すべての愛は美しく、端正であり、またとりわけ端正なものを愛するから。ところが、われわれを放縦へ駆り立てる荒れ狂う情熱は、醜悪へとさそうゆえに、愛と反対なものだと判断される。

このようにしていまやようやく、愛の有益性に話をもどそう。醜いことからわれわれを遠ざける恥や、誉むべきことへ燃えたたせる熱意は、愛から容易にしかもすみやかに発せられる。まず、なぜなら、愛は美をもとめるから、つねに端正で壮麗なものを望む。また愛は醜悪なものをきらうから、醜く卑猥なものを必ず避ける。ついで、誰かある二人が互いに愛し合うとするならば、かれらは互いに他方の者を見守って、互い

に気にいられようと望む。一方の者が他方の者から見守られているかぎり、目撃者がいないわけではけっしてないのであるから、かれらは破廉恥なことをつつしむ。かれらが互いに気にいられようとしているかぎり、愛した者に軽蔑されないためのみならず、しかえ愛されるにあたいするものとみなされようとして、つねに燃えるような熱意で光輝ある行動をなさんとするものである。

だがパイドロスは、愛の三つの例を述べる際に、この理由を詳細に説明している¹⁴⁾。ひとつは、男性に対する女性の愛の例であり、そこでは夫の身代りにすすんで死のうとしたアドメトスの妻アルケステリスについて話されている。もうひとつは、エウリュディケに対するオルペウスの愛のように、女性に対する男性の愛の例である。3番目のは、アキレウスに対するパトロクロスの愛のように、男性に対する男性の愛の例である。そこにおいてパイドロスは、愛ほどひとびとを勇ましくするものはないことを示している。なぜならそれらは、寓意によっていわれたこととみなされる場合よりも、あたかも歴史的出来事として物語られる場合の方が、愛の力と権勢をいっそう強烈に表現するから。

それゆえ、愛は偉大にして賛嘆にあたいし、さらに高貴にしてきわめて有益な神であるということを、われわれは異議なく認める。しかもわれわれは、美そのものというその目的に満足しているだけに、それだけ愛に寛大である。実をいえば、われわれは美を、われわれの認識する範囲内において享受するのである。われわれはそれを、精神と視覚と聴覚で認識する。それゆえこれらでもって美を享受する。われわれが他の諸感覚によって享受するのは、愛が欲求する美ではなくして、むしろ身体が必要とする何か他のものである。それゆえわれわれは、これら三つのものによって美を狩りもとめるであろう。そして声や身体の中に輝き出る美を通じて、あたかもいわば足跡を通じてのように、靈魂の端正を探求するであろう。われわれはもちろん、身体的美を賞賛するであろう。精神の端正に賛同するであろうし、しかもつねに、美が偉大であっただけ愛も偉大であるように、それを維持しようと努めるであろう。そして、身体はたしかに美しいが、靈魂はすこしも美しくない場合には、あたかも美の影となつてうつろう像のように、われわれはほとんど愛さないだろうし、愛したとしても軽薄にそうするだけであろう。も

14) プラトン『饗宴』, 179b-180b.

し靈魂のみが美しい場合には、われわれは靈魂のこの確固たる端正を熱烈に愛しよう。だが両方の美が相ともなえる場合には、われわれはなおいっそうはげしく賛美しよう。そしてこのようにしてわれわれは、われわれが真にプラトン学派に属していることを証するであろう。なぜならプラトン学派は、楽しい、喜ばしい、天なる、神的なもの以外の何ものをも知らないからである。

だがパイドロスの談話についてはもはやこれで十分である。パウサニアスの方へ移ろう。

第 2 話

第1章 神は善、美、正義であり、初め、真中、終りである

ピュタゴラス派の哲学者たちは、三という数を万物の尺度であるとした。それは、神が事物を三という数によって支配し、しかもまた事物そのものが三という数によって限定される、という理由のためであると私は思う。ここからウェルギリウスのつぎの言葉が由来する。

「神は奇数をよろこぶ」¹⁵⁾。

たしかに、かの至高の創造者は、最初にあらゆるものを創造し、2番目に魅了し、3番目に完成する。あらゆるものもまた、生まれるときには最初にかのつきることのない源泉から流れいで、ついでその起源へ帰るときには同じ源泉へ逆流し、最後にその始源に帰った後に完成される。オルペウスはこのことを予言して、ユピテルを万有の初め、真中、そして終りと呼んだ¹⁶⁾。彼が生ぜしめるかぎり初めであり、彼が生ぜしめたものを自分の方へひきもどすかぎり真中であり、彼が自分へ帰ってくるものを完成するかぎり終りである。このゆえにわれわれは、プラトンにおいてしばしばいわれるように、かの宇宙の支配者を、善、美、正義と名づけることができる。彼が創造するときに善、彼がひきつけるときに美、彼がそのものの功罪にしたがって完成するときに正義、と私はいう。それゆえ、その特質がひきつけることである美は、善と正義との間におかれる。すなわち、美は善から流れ出て、正義へ流れてゆくから。

第2章 どのようにして神的美は愛を生み出すか

ところですべてのものにおいて、この神的美は愛を、すなわち美自身への欲求を生ぜしめる。なぜなら、もし神が世界を自分へひきつけ、そして世界がひきつけられるならば、神から始まり、世界へ移行し、最後に神において終わる、あるひとつの連続せる牽引が存在する。そしてこの牽引は、あたかもひとつの円環のように、それがそこから発した同じところにふたたび帰る。このようにして、神から世界へ、そして世界から神へと行くひとつの同じ円環は、三つの名前と呼ばれる。すなわち、それは、神のうちに始まり、神へひきつけるかぎり、美と呼ばれる。それは世界のなかに移行し、世界を魅了するかぎり、愛と呼ばれる。それは、創造者のもとへ帰り、その業を彼と結びつけるかぎり、快樂と呼ばれる。それゆえ、愛は美に始まり、快樂に終わる。それこそは、ヒエロテウスとディオニュシウス・アレオパギタの、かのすばらしい賛美歌がいおうとしていることである。そこにおいてこれらの神学者たちは、つぎのように歌った、「愛は善から善へと永久にめぐる善の輪である」¹⁷⁾。実際、愛は必然的に善である。なぜなら愛は、善から生まれて善へ回帰するから。同様にして、愛は神である。すべてのものはその美を欲求し、すべてのものはそれを所有することにおいて休らう。それゆえ、神によってわれわれの欲求は燃えたたされる。神において愛する者たちの情熱はおちつく。というのも、情熱が消えるからではなくして、みたされるからである。またディオニュシウスが、神を太陽に比するののもっともである¹⁸⁾。なぜなら、太陽が身体を照らしあたためるように、そのように神は靈魂に真理の光と愛の情熱をささげるから。もとより、われわれがこの比較を、プラトンの『国家』の第六巻¹⁹⁾からどのようにしてとりだすかを、私は語ろう。

事実、太陽は見られる物体と見る眼を生み出す。すなわち太陽は、眼が見えるように眼には明晰な精気を注ぎ込み、物体が見られるように物体には彩色する。もし、眼と物体に固有の多くの光がそれから分ち放たれる、多くの光のうへのひとつの光そのものが、出現し、照明し、刺激し、そして強化するのでないならば、眼に固有の光線も物体に固有の色彩も、視覚を完全なものとするには十分でない。

同じ仕方で、神と呼ばれるすべてのもののうち最初

15) ウェルギリウス『牧歌』, VIII, 76.

16) プラトン『法律』, IV, 715 E. およびアリストテレス『宇宙論』第7章.

17) 偽ディオニュシウス『神名論』, IV, 712 D.

18) *Id.* IV. 693B, 697BC.

19) 『国家』, VI, 507 e.

のかの現実態は、あらゆる事物に、それらを生み出すに際して、形相と働きとをさずけた。たしかに、この働きは、被造物のなかにまた受動的基体のなかに受け入れられたときには、弱まってしまい、その活動を行なう能力をなくしてしまっている。だが、神的太陽の永遠にして見えざる光は、すべてのものにつねに臨在しており、そのことによってあたため、活気づけ、刺激し、不足なきものとし、強化するのである。そのことについて、オルペウスは神意を告げてつぎのようにいっている。

「それはすべてのものをあたため、
すべてのもののうえに注がれる」²⁰⁾。

それはすべてのものの現実態にして強化する働きであるゆえに、善なるものといわれる。それは活気づけ、やわらげ、なぐさめ、刺激するゆえに、美なるものといわれる。それは、認識されるべき対象へ、靈魂のかの三つの認識能力、すなわち精神、視覚、聴覚をひきつけるゆえに、美といわれる。それは認識能力のうちにある、その認識能力を認識される対象に傾注させるゆえに、真理といわれる。最後に、それは善なるものとして、生み出し、支配し、完全なものとする。それは美なるものとして、照明し、恩恵を注ぐ。

第3章 美は神的善の光輝であり、神は四つの円の中心である

古代の神学者たちが善を中心に、美を円周においたのは、事理にはずれたことではない。たしかに、善は唯一の中心にあるが、美は四つの円周にある。すべてのものの唯一の中心は神である。神のまわりの四つの円周は、精神、靈魂、自然、物質である。精神は不動の円である。靈魂は自分で動くものである。自然は他のもののなかで動くが、他のものによって動くものではない。物質は、他のものによっても、他のもののなかでも動くものである。だがなぜわれわれが神を中心と呼び、他の四つのものを円周と呼ぶのかを、以下に手みじかに説明しよう。

円の中心は唯一の、不可分な、不動の点である。この中心から、数多くの、可分な、可動な線が、それらに相応せる円周へ引かれる。この可分な円周はもちろん、いわば軸のまわりのように、中心のまわりをまわる。そして中心の本性とは、それがひとつの、不可分な、不動のものではあるが、それにもかかわらず、可分にして可動な、多くの線のなかに、あるいはむしろ

すべての線のなかに、いたるところに見出されるということなのである。なぜなら、線においてはいずこも点であるから。だが何ものも、それ自身とは異なったものによっては触れられえないのであるから、円周から中心にいたるまで引かれた線は、それらのおおの単純で不動なあるひとつの点によってしか、このような中心点には触れられえないのである。神をすべてのものの中心と正当に名づけることを拒む者がいるだろうか。なぜなら、神はすべてのものに、ひとつのまったく単純にして不動なものとして内在しているから。反対に、神から生ぜしめられたすべてのものは、多数の、複合された、そしてある程度可動なものであり、しかもそれらは神から流れ出たものであるゆえ、線や円周のように神へ逆流しようとする。

このようにして精神、靈魂、自然、物質は、神から発しているが、神へ帰ろうとつとめ、またいたるところでそれらの特性にしたがって神の方へとまわっていつている。さらに中心点が線や円周全体においていたるところに見出されるように、またその点を通じてこれらの線のおおのが円の中点に触れるように、そのように、もっとも単純な一者にしてもっとも純粋な現実態である万物の中心たる神は、あらゆるもののなかへ入り込んでいいる。それは、神がすべてのものに現前しているからということのためのみならず、また神の創造したすべてのもののなかに、神は、事物の統一と呼ばれるもっとも単純にしてもっともすぐれたある成分、あるいは内的能力を、入れたからということのためでもある。そしてあたかもそれ自身の中心に依存し、その中心へ向かっているかのように、各事物の残りの部分や能力は、それに依存しそれへ向かっているのである。われわれがすでにしばしばくりかえしていつてきたように、被造物は、それら自身の中心を通じてすべてのものの中心に固着するためには、それらの創造者に固着するよりも前に、それらの中心に、すなわちそれら自身のこの単一性に結びつけられているでなければならない。天使的精神は、神へ上昇するよりも前に、それ自身の頂点や先頭にあがる。靈魂や他のものなどにしても同様である。しかも可視的世界の円は、かの不可視的円、すなわち精神、靈魂、自然という円の影像である。なぜなら、身体は靈魂や精神の影であり痕跡であるから。ところで影や痕跡というのは、影とはその影であり、痕跡とはその痕跡であるところのものの姿を再現している。それゆえに、かの四つのものが四つの円と呼ばれるのは、不当なこ

20) オルペウス：フィチーノ『全集』I, 934 参照。

とではない。

しかしながら、精神は不動の円である。なぜなら、その活動は実体のようにつねに同じままであり、同じ仕方で働くからである。精神はつねに同じ仕方で理解し、同様に意欲する。しかしながら、精神は可動的だといわれうる。だがもっぱら、それが他のすべてのもののように、神から発して神へ回帰するというかぎりにおいてのみそういわれうるのである。世界靈魂は、また他のどんな靈魂にしても、可動的な円である。なぜならそれはその本性上、走りまわることによって認識するのであって、走るのに時間を要するのであるから。ところであるものから他のものへと走りまわること、および時間の活動というものは、疑いもなく、運動と名づけられる。実際、もし靈魂の認識のうちに安定というものが何かあるならば、それは靈魂のおかげによるというよりも、むしろ精神のおかげによるのである。自然もまた動く円である。われわれが靈魂というとき、われわれは古代の神学者たちのやり方で、理性と感覚のうちに存する靈魂の力という意味に理解する。また自然というときわれわれは産出することのうちにある靈魂の力という意味に理解する。かれらは、われわれにおける前者の力を適切にも人間と呼び、後者の力を人間の表象とか映像と呼んだ。それゆえまさしくこの産出する能力は可動的だといわれる。なぜなら、その仕事はある時間を経てなしとげられるから。しかしながら、この点においてそれはかの靈魂の特性とは異なっている。すなわち靈魂は、それ自身によってまたそれ自身において動かされるのである。それ自身によって、と私はいう。なぜならそれはその運動の始源であるから。また、それ自身において、というのは理性と感覚の作用は、靈魂の実体そのもののうちにとどまっているから。それゆえ、それらの働きはかならずしも身体に反響を及ぼすわけではない。反対に、われわれが自然と呼ぶかの産出力は、たしかにそれ自身によって動く。なぜならそれは、それ自身によって動くいわばある靈魂の力なのであるから。しかしながら自然は、ある他のもののなかで動かされるともいわれる。なぜなら、そのすべての作用が身体のうちに限定されているからである。実際、自然は身体を養育し、成長させ、生み出す。物質や身体は、他のものによってまた他のもののなかで動く円である。すなわち、他のものによってというのは、それが動かされるのはかならず靈魂によってであるから。さらに、他のもののなかでというのは、身体の運動はある場所的空間のな

かで行なわれるからである。

それゆえいまや、なぜ神学者たちが善を中心におき、美を円周におくのかという理由を、われわれは明らかに理解することができる。まことに、あらゆるものの善は、それによってすべてのものが善となる一なる神自身であるから。他方、美は、いわば神のまわりをまわるかの四つの円に注ぎ込まれる神の光線である。このような光線は、かの四つの円のなかにあらゆる事物のあらゆる形象を表現する。それらの形象をわれわれは、精神においてはイデア、靈魂においては理性、自然においては種子、物質においては形と呼びならわしている。それゆえに、四つの円のなかに、四つの光輝があるのが見られる。第1にはイデアの光輝、第2には理性の光輝、第3には種子の光輝、最後に形の光輝がそれである。

第4章 プラトンはどのように神的事物について説明するか

プラトンはこの玄義を、ディオニュシウス王宛の書簡において明かした。そしてその際、神はすべての美しいものの原因、いわばあらゆる美の初めにして起源であると主張した。

彼はいつている。「一切のものは万物を統べる王のまわりにある。万物はその王のためにある。彼はあらゆる美しいものの原因である。第2のもののまわりには第2位のものたちがあり、第3のもののまわりには第3位のものたちがある。だが人間の靈魂は、それらが何であるかを知ろうとして、自分と類縁のものたちに目を注ぐ。そしてそれら類縁のものたちのうちには、十分であるものは何もない。反対に、王自身のまわりや私の述べたものたちのまわりには、このような不十分なものは何ひとつない。だが靈魂は、これの後にあるものを語るのだ」²¹⁾。

「王のまわりに」ということは、王のなかにということではなくして、王の外にということの意味している。なぜなら、神のなかには複合というものはまったくないのだから。かの「まわりに」という言葉が真に何を意味しているのかということを、プラトンは、「彼のおかげですべてのものが存在する。彼はあらゆる美しいものの原因である」とつけ加えるときに説明している。それはいわば彼がつぎのようにいつていることである、「すべてのものは王のまわりにある。なぜなら、すべてのものはあたかも始原から生じたよう

21) 『書簡』, II, 312 e.

に、王から生じた。そのように、すべてのものはその本性上、あたかもその終末へ回帰するかのように、王へ回帰するからである」と。「あらゆる美しいものの」、すなわち、上に述べた円のなかに輝き出るすべての美の。実際、身体の形相は種子によって、種子は理性によって、理性はイデアによって、神へひきもどされる。そしてそれらは同じ階梯において神から生ぜしめられる。だが彼が「一切のもの」というときにはまさしく、彼はイデアのことを意味している。なぜなら、イデアのなかには残りのものが含まれているからである。

「第2のもののまわりには第2位のものたちがあり、第3のもののまわりには第3位のものたちがある」。アフラ・マズダー、ミトラ、アーリマンという世界を統べる三柱の君主、三つの階級をつかさどる主がいる、とゾロアストラ²²⁾はいった。プラトン²³⁾はこれらを、神、精神、靈魂と呼んでいる。さらに彼は、神的な形相のなかに三つの階級をもうけている。すなわち、イデア、理性および種子である。それゆえ、第1位のものたち、すなわちイデアは、第1のものすなわち神のまわりをまわる。なぜならイデアは、神によって精神に付与されたのであり、そしてそれが与えられた精神を神に立ちもどらせるからである。「第2のもののまわりには第2位のものたちがある」。すなわち、精神のまわりには理性がある。なぜなら、理性は精神から靈魂のなかへと移行し、そして靈魂を精神の方へと向けるからである。「第3のもののまわりには第3位のものたちがある」。すなわち、靈魂のまわりには事物の種子がある。なぜなら、種子は靈魂を経て自然のなかへと、すなわちかの生み出す力のなかへと移ってゆき、そしてふたたび自然を靈魂にむすびつけるから。同じ順序で、形は自然から物質へと下降する。だがプラトンは形を、所定の順序のなかに数え入れていない。なぜなら、神的なものについてディオニュシウスによってたずねられた彼は、形体のない形相に属する三つの階級を、あたかも神的なもののように説明した。だが彼は物体の形をはぶいたのである。しかしながら彼は、神を第1の王と呼ぶことを望まないで、万物の王と呼んだ。それというのも、もし彼が神を第1のものと呼んだとするならば、神をそれにつづく支配者たちといっしょにある種の数的順序のなかにおき、そしてかれらとのある条

件の同等性のなかにおくことと思われるといけなからである。また彼は、神のまわりには第1位のものたちがあるとはいわないで、一切のものがあるといったのは、神が一切を統べる者だというよりも、むしろ、あるなんらかの階級を統べる者だとわれわれが信じることのないようにするためである。

「人間の靈魂は、それらが何であるかを知ろうとする」。三つの円のなかに輝き出る神的美の三つの光輝の後に、彼はたくみに、それらの光輝に対する靈魂の愛をつけ加えた。実際、そこにこそ、靈魂の情熱が燃えたたさるのである。なぜならまさしく、神的なものが神的な事物をもとめるのは、ふさわしいことであるから。

「自分と類縁のものたちに目を注ぐ」。人間の認識は感覚から生ずるゆえに、われわれは、われわれがすぐれて身体のなかに見るものによって、神的なものをしばしば判断するのがつねである。われわれは、身体的なものの力によって神の能力を、それらのものの秩序によって神の英知を、それらのものの有用性によって神の善良さを探求する。さらに彼は物体の形のことを、あたかも最近親者のように、靈魂に類縁なものと呼ぶ。実際、物体の形は、靈魂の後ににつづく段階に位置づけられる。

「それら類縁のものたちのうちには、十分であるものは何もない」。このような形は、われわれにとって十分であることもなければ、われわれに十分に神的なものを示すこともない。なぜなら、真の事物はイデアであり、理性であり、そして種子である。ところが物体の形は、真の事物というよりも、むしろ事物の影であるように思われる。実際、物体の影は物体の正確で判明な姿を知らせはしないように、そのように物体は神的なものの固有の本性を明示しはしないのである。

「王自身のまわりや私の述べたものたちのまわりには、このようなものは何ひとつない」。実際、死すべきものが不死なるものに、また虚偽のものが真なるものに、どうして似ていようか。

「だが靈魂は、これの後にあるものを語るのだ」。すなわち、靈魂は、神的なものを死すべきものによって判断するかぎり、神的なものについては誤って語るなのであって、それが告げるのは、神的なもののことでなくして、死すべきもののことである。

22) プルタルコス『イシスとオシリスについて』、369d-370d 参照。

23) プラトン『ティマイオス』、30a.

なおまた、多くのことを手短かに要約すれば、善は神の卓絶した実存そのものであるといわれる。美はある現実態である、すなわち、神から発してすべてのものに透入する光線である。第1には天使的精神のなかに、第2には世界靈魂とその他の靈魂のなかに、第3には自然のなかに、第4には物体の質料のなかに。この光線は、精神にはイデアの位階を飾り、靈魂を一連の理性で満たし、自然を種子でささえ、物質には形をととのえてやる。ところで太陽のただひとつの光線が、火、空気、水、そして土という四つの物体を照らして

いるように、神のただひとつの光輝が、精神、靈魂、自然、そして物質を照明しているのである。そしてこれら四つの元素のうちに光を見るものは誰でも、太陽そのものの光線を見るのである。そしてその光線を通じて彼は、太陽の天上的な光を志向するようにさせられるのである。そのように、精神、靈魂、自然、物体というこれら四つのもののうちに美を觀照し、そしてそれらのもののうちに神の輝きを愛し、またこのような輝きを通じて美を愛する者は誰でも、神そのものを洞見して愛するのである。

(未完)